

The DIY SQUARE mag

VOL.6



CAINZ CARD POINT

50pt
present!!!



アンケートでポイントプレゼント!!

Special Feature:

About DIYer Life!

特集 DIYerのつくりかた。feat. SHINPEI [STUDIO OWNER]

👉 CAINZ CARD POINT 50pt Present!

アンケート回答でカインズカードポイント50ポイント進呈!

アンケート締切:7月31日

※ポイントは締切の翌月中旬頃に付与します。号ごとに、おひとり様1回までご参加いただけます。

SMALL OASIS



SHINPEI

ABOUT DIYER LIFE!
03

植物を手にするのはインテリアを楽しむのと同じ感覚。

「僕はインテリア系の専門学校を出ていますが、その後の就職先は意外と限られています。この仕事が新しいひとつの方向性を示せたらいいなと思っているんです」

現在「PLEASE GREEN」の代表としてスタジオを運営しているSHINPEIさんの自宅にはたっぷりの植物がある。床、棚、そして天井から、元気な緑が顔を覗かせる。空間



を意識したレイアウト、都心のマンションとは思えない自由で生き生きとした空気。朝と昼と夜、時間によってその表情は異なって魅力的だ。どこにいてもアイデア次第で景色が変わることをそっと教えてくれる。

「実は植物にはそんなに詳しくないんです。単純にフォルムが好きで、葉の色味もそれぞれ違うところも面白いなと思ってます。インテリアが好きだから、植物を手にするのはその感覚に近いです。この空間にこれがあればいいな、と形を想像して買い物に出かけます。」



そろそろ置き場もなくなってきたから、完成形に近いでしょうか。眺めながらにやにやしています。アート好きな人が絵を眺めているのと同じ感覚だと思います」

好きなものは学生時代から変わらないというSHINPEIさん。自宅には植物以外にも彼の“好き”なモノが溢れている。必ずDIYするという棚は計算されたように部屋にぴったりと収まり、空間を楽しく彩っている。

「インテリアを考える時って、自分の居心地のいい場所から決めていくと思うんです。例えばソファの置き場所とか。その余った空間に何があればいいかなって。自分の好みとぴったりするものを探すのは難しいから、つくろう。そんなシンプルな発想ですね」

たくさんの植物があれば枯らすこともある。



それは友達と一緒に相性の違いかも知れない。じゃあ違ったのかな。SHINPEIさんはそんな風に考える。苦手かな、嫌いかな、と思うものを排除していく。その結果残ったのが今の暮らしだ。40年以上経つ自宅も、その古さを活かすようにレイアウトした。なるべく手は加えず、素を活かすのが彼らしさだ。

「僕は映画が好きで、植物に興味が出たのも『レオン』を観た時かもしれない。ひとつの植物をあんなに大切にしている気持ちがとても印象的で、僕らの原風景かもしれないです」

小さなきっかけで世界は大きく変わる。

CAINZ COMMENT

植物が好き。
そんな純粋な気持ちを
思う存分に楽しむ。

「都心やマンション暮らしなど、人によって環境はさまざまですが、好きという気持ちを簡単に形にできる道具があったらいいなと思っています。『リバーシブル式 どこでもガーデンフレーム』は、小さなスペースさえあれば、どこにでも花壇が作れちゃう優れたもの。コンクリートの上だって花壇が作れます。お庭がある人も

この道具を使うことで、水捌けが良くなり、家庭菜園や花壇を手間なく楽しめる可能性がグッと増えるんです。レンガや連杭、ブロックなどを追加すれば、シンボルツリーを植えたり、今流行りのドライガーデンも作れます。使い次第でたくさんの楽しみを体験できる道具がひとつあると、暮らしは豊かになると考えてます」

Comment by



佐藤勇輔
(グリーン
ガーデン部所属)

環境や状況に縛られず好きなガーデニングを楽しみたい。自由な発想を形にできるアイテムが最近のお気に入り。



Profile SHINPEI

都内の築40年以上のレトロマンションで、100種類近い植物と暮らしており、さまざまなメディアでも取り上げられる。リアルな生活感を植物が包むハウススタジオ「PLEASE GREEN」のオーナーとしても活動中。@shin_pei

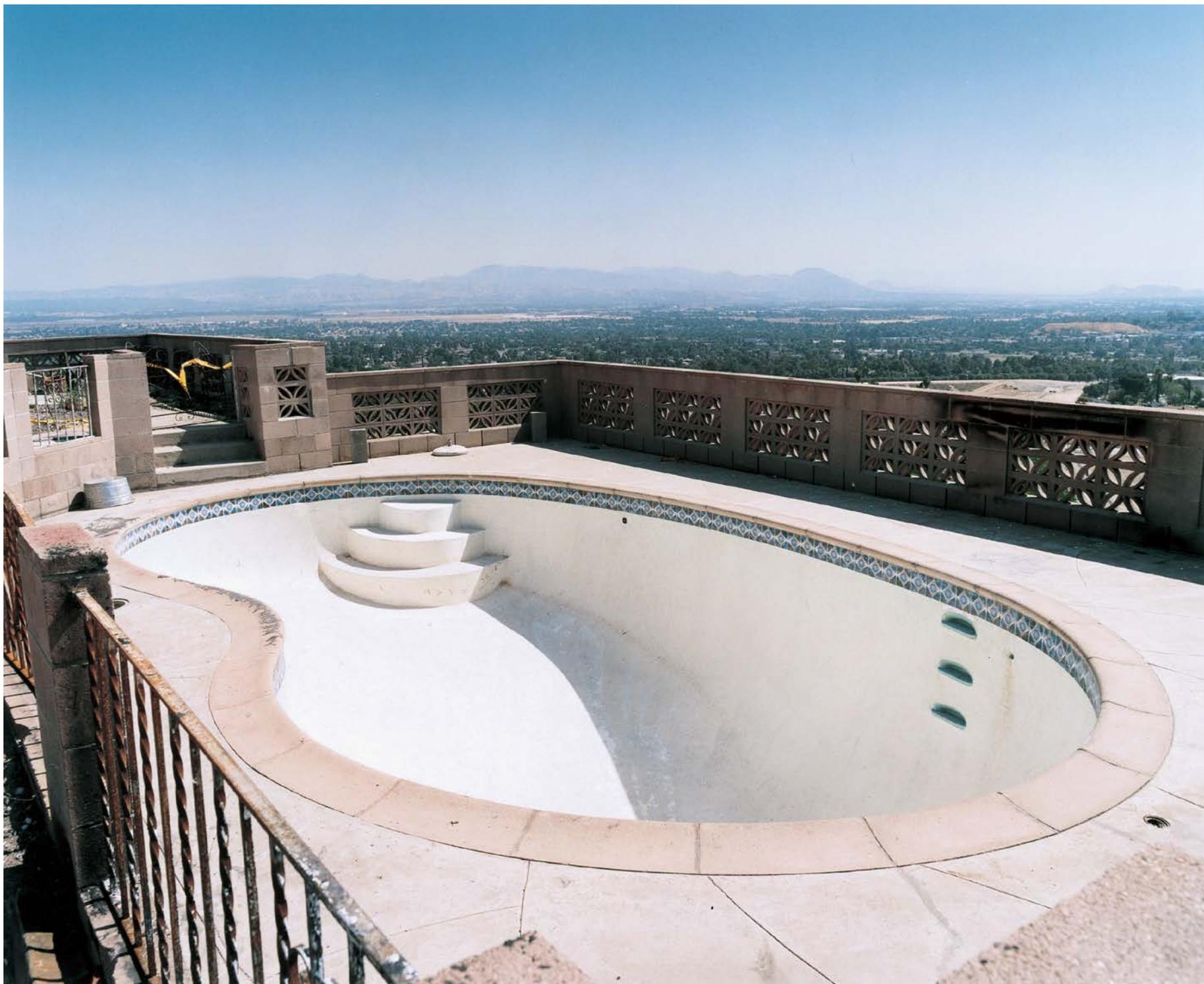


Photo: Taro Hirano

THE MOMENT

あっ、それDIY。

—
vol.01
POOL SKATEBOARDING

空っぽのプールで生まれた新しいカルチャー。

1970年代にカリフォルニアで起こった大干ばつ。ロサンゼルス郊外に建ち並ぶ住宅のプールは水不足で水を張ることができず、空の状態になっていたという。そんな空っぽのプールに目を付けたのが、街をスケートボードで颯爽と滑るスケーターだった。「このボウル状のプールを滑ったら、延々と波乗りをしているような感覚が味わえるんじゃないか」そんなひらめきからプールスケートというカルチャーが生まれたと言われている。

スケートボードのすべてを知りたくて、プールスケートをアメリカで体験し、写真集『POOL』を出版した写真家・平野太呂さんはプールスケートからアメリカ人のたくましさ、ワイルドさを感じたという。「干ばつで

水のない状況だったり、景気が悪くなってプール付きの空き家が出てきてしまったり、本当は苦しい状況なのに、それを逆手にとって自分たちの遊びに利用してしまうというのがタフなアメリカ人らしくて面白かったですね」。また平野さんが現地で会ったスケーターたちはホームセンターも愛用していたという。「枯れたプールを掃除するのにモップやバケツをみんな持っていました。スケーターはDIY好きも多く、ホームセンターも馴染みのある場所です」。すでにあるものに新しい価値を与える発想力と、より楽しもうという工夫。カインズの大切に行っているDIY精神の大切な部分がプールスケートカルチャーにも根付いていた。

